

Art in Hospital

患者と医療従事者に優しい病院環境をつくる

充実した設備で千葉県の癌医療を牽引する

②④ 千葉県がんセンター (千葉県千葉市)



旧病院と同じ敷地内に建てられた新病院。新型コロナの臨時医療施設に使われた旧病院(左下)が取り壊されずに残っている

開院したのは半世紀前の1972年。その後、拡張が繰り返されて来たが、耐震上の問題や配管等の老朽化から建て替える事となり、2020年10月に地下1階、地上9階建ての新病院が開院した。旧病院は、改修して使う一部を残して取り壊される筈だったが、21年9月まで新型コロナウイルス感染症の臨時医療施設として使われた為、現在もまだ残ったままになっている。

新病院は採光部が大きく、明るく開放感があるのが特長だ。外来が在る2階の通路は、上部から外光が降り注ぐ構造になっている。「病院という

よりエアポート風」と患者の評判は上々だ。

旧病院は341床だったが、新病院は450床。高齢化に備えて緩和ケアの病床を25床から53床に増やし、血液癌に取り組む為無菌室も増やした。又、高度な癌医療が提供出来る様、医療機器も充実させた。手術支援ロボットは2台体制にし、従来行って来た泌尿器科だけでなく、他の診療科でも使える様にした。放射線は、診断の為のPET-CTやAngio-CT、治療では最新のIMRTを導入。薬物療法を行うがん薬物療法センターには、多様なタイプのベッドを用意し、数も増やした。



患者と家族の為の図書室「にとな文庫」。患者サロンが開催され交流の場でもある



「患者目線を大切にしている」と語る飯笹俊彦病院長



「患者総合支援センター」で相談や、適切な支援が受けられる



緩和ケアの患者用に病棟屋上に設けられたバリアフリーのテラス



採光部を大きく取った設計が特徴



外からの光が降り注ぎ、明るく開放感がある外来フロア

患者の為の癒しの施設としては、「患者サロン」が設置されている。ここでは「ピア・サポーター」と呼ばれる癌体験者と話をすることが出来るし、ゆっくり本を読む事も出来る。サロン内には癌関係の図書や一般図書3000冊余りを集めた「にとな文庫」が在る。司書もいて、図書の貸出も行っている本格的な図書室である。

もう1つ特筆すべきなのは「患者総合支援センター」である。看護師、医療ソーシャルワーカー、薬剤師等多様な職種のスタッフで構成され、患者のどんな相談にも乗ってくれる。「それについて

はあちらで聞いて下さい」と言われる事無く、ワンストップで必要な支援が受けられるのが特長だ。カウンターの面談スペースが10個、個室が6室あり、プライバシーにも配慮されている。

飯笹俊彦病院長は、「癌医療は均てん化と個別化の2方向に進むと思えますが、新病院により、その体制が整ったと考えています」と語る。都道府県がん連携拠点病院として県の癌医療を牽引して行く使命を担い、ゲノム医療拠点病院としてゲノム医療にも取り組んで行く。

設計・施工:(株)日建設計、フジタ・畔蒜工務店特定建設工事共同企業体